世田谷村日記

石山修武

十月三一日

朝、藤塚光政世田谷村撮影。藤塚は建物も良いが、人間撮った方がもっとうまいとかねがね考えていたが、どうやら少しづつそれを試みているようだ。藤塚の写真の特長はアングルを正常な位置から微妙に振ることだと、ＧＡの高瀬さんが言っていたのを思い出す。人間を撮るのはその連続だろうから。世田谷村の人たちというのが今日の撮影のテーマだったが光も良くて、藤塚も乗っていたからいい写真がとれただろう。室内十二月号の表紙用の撮影だった。おフクロもオジさんもイヤダイヤダあーだ、こーだといいながらも結構楽しんでいた。考えてみれば極く極く普通の生活者がプロの写真家の被写体になるチャンスはあまり無いわけで、藤塚も三宅一生のファッションショーを撮り続けてきたのに、プロのモデルじゃないアマチュアを撮るのに苦労していると思う。プロのモデルはやっぱり表現力があるからね。その場にいる生活者としてのモデルが表現し始めたら、つまりオジさんオバさんが被写体としての表現力を発揮し始めるようになったら、空間という概念はひどくリアルに変化してしまうだろう。舞台美術と俳優の関係かな。

撮影中途で失礼して学校へ。昼過ぎ松崎町役場の森さん田口さん来室。伊豆文の再生計画を来期に延ばしたいとの事。議会がよじれて、それを解きほぐすのに時間が必要との読みがあっての事なので、わかりましたと了承する。わざわざごていねいに足を運んでいただき、かえって恐縮してしまう。私の方の態勢も一向に急ぐ必要はないし、キチンと万全の準備をしてからの方が良いかも知れない。こんな時代に無理は禁物だ。その間、近藤二郎さんの倉のことを着実にすすめなければいけない。田口さんには屋上菜園のこと相談しなくては。彼は菜園のプロらしい。松崎町で菜園付の別荘売り出したらいいのに。修士論文ゼミの後、星の子愛児園現場へ。今日から建方が始まっている。夕方、現場で高橋弟とトビ職と会う。職人の中には我家の建方で顔なじみになった者もいて、再会を喜んだ。本当に職人はかわいい。私ももうそう言っておかしくない年になった筈だ。近藤理事長も現場に来て気仙沼の造船所からの鉄骨と対面した。高橋のところの鉄製品はやっぱり一作一作うまくなっていて、松島さかな市場の鉄とはもう一味も二味もちがっていた。せんだいメディアテークでもまれたのも本当に良かったのだ。